



「生」の経験

副校長 市村 大

6月は運動会が行われ、体力テストもあり、プールが始まり、6年生は岩井移動教室もありました。とても盛りだくさんの1か月だったと思います。しかし、忙しいからこそ、時間の経過もあったという間で、気が付けば6月も終わり、1学期も残り3週間を切りました。子供たちが楽しみに待っている夏休みもうすぐです。

最近は少しずつ落ち着きを見せているとはいえ、まだまだ新型コロナウイルスの影響は色濃く残っています。コロナ禍で、以前は当たり前に行えていた旅行も、控える人が多くいるのが現状です。私は担任をしていたころ、子供たちに「夏休みになったら、普段は行けないようなところへ行き、そこでしか味わえないことを体験してきてほしい」と伝えていました。技術が進化し、様々な情報が簡単に手に入る時代になったとはいえ、生の感覚に勝る経験はありません。動画や画像では感じ取れない、その場の雰囲気や五感に訴えかけてくるものがあります。

小学生時代、初めて沖縄に行った時のことを、今でも鮮明に覚えています。飛行機から見た海の色が、それまで知っていた海の色と全く違いました。砂浜に立った時、砂浜が白いことに驚きました。離島で夜空を見たとき、生まれて初めて「天の川」を見ました。物語の中にしかないと思っていた世界。「昔の人が星を手に入れるために屋根に上り、竹竿を振り回した」という笑い話のようなことを聞いたことがありましたが、その時に初めて、その昔の人の気持ちが分かりました。手を伸ばせば届くのではないかと思うところに、星があるのですから。

その頃の離島は、まだまだ戦争の爪痕が分かりやすく残っていました。ある洞窟に、大量の人骨があったことを覚えています。作り物ではない、リアルな遺産。不思議なもので、怖いという感覚ではなく、思考が止まるような感覚でした。自分が見ているものの理解が、頭の中で追い付いていなかったのでしょう。その出会いは、のちに自分が歴史に興味をもち、日本現代史を専攻することと無関係ではなかったと思います。原風景として、強く印象に残りました。

夜中にウミガメとも出会いました。沖縄にはキャンプで行っていたのですが、引率の先生が「ウミガメがいる」と起こしてくれました。見に行くと、卵を産み終えたウミガメが、海に帰っていくところでした。人生で、自然界のウミガメに出会ったのは、今のところこれが最初で最後です。

もう一つ。8年前に初めてイタリアを旅行した時にも、様々な衝撃を受けました。入国時にパスポートを見せただけで、入国の印も押されず投げ返され、「早く行け」とジェスチャーされました。すごく混んでいましたからね。街中の時計がみんな違っていても驚きでした。ガイドさんが、「誰も時計を見ない。バスの時刻なども確認しない。だって、運転手同士がバスを止めてコーヒー飲んでいるから。」と教えてくれました。電車に乗るときも、何番線に何時に着くとか、一切出でていませんでした。その日・その時にならないと分からないそうです。でも、みんな陽気でいい人たちでした。その環境が当たり前で、それで不便なく生活をしているのです。日本の常識がすべてに通用するわけではないことを実感しました。なお、最後に行こうと思っていた現地のレストランが、予告なく「サマーバケーション」に入り、次の開店が2か月半後だったのも笑えました。

コロナ禍でまだまだ難しい面もありますが、そろそろ、できる範囲で行動圏を広げてみてはいかがでしょうか。夏休み明けに、たくさんのお話が聞けることを楽しみにしています。